



横幹連合の可能性

横幹連合 会長 木村 英紀*



横幹連合も発足以来5年、NPOになってから3年経ちました。このたび、発足当初から連合が支柱として頼ってきた吉川弘之先生から会長職を引き継ぎました。すべての面で吉川先生に遠く及ばない私です。粉骨砕身、連合の使命を果すべく努力するしかありません。会員諸学会の執行部の皆様、連合の理事をはじめ連合の主張に共鳴して活動して下さっている皆様方のこれまでと変らぬ御支援を心からお願いする次第です。

最近故あって第二次大戦中の日本の兵器開発について調べました。調べてみると日本の兵器開発の考え方や仕組みに大きな欠点があっただけでなく、日本の科学技術がその欠点を今でも引きずっていることが分かりました。たとえば陸軍と海軍が共同で兵器を開発した例はほとんどありません。火器や航空機、レーダから原子爆弾に至るまで、その開発にはすべてそれぞれが自前主義を貫いただけでなく、予算や機材を奪い合い、成果も隠しあいました。この伝統は省庁間の縄張り争いやタテ割り行政に今なお色濃く残っているのではないのでしょうか？また、軍は直接目にみえる戦力の増強に兵器の開発目標を集中させました。大砲で言えば口径や射程距離、航空機で言えば火力や航続距離などです。たとえば大砲の戦場での運搬方法や航空機の作

りやすさ、レーダなどの情報兵器の開発など、戦力の総合的な展開にかかわる開発にはあまり関心を示さなかったのです。これも今の日本の研究評価システムが、目に見える個々の成果を重視する考え方として残っているような気がします。その他にも沢山ありますがこの辺にしておきます。

故障だらけの旧軍の古色蒼然たる兵器と、世界に誇るものづくり日本の製品を比べるのも愚か、と思われる人も多いでしょう。しかし、その背後には連綿と続く日本の技術文化があります。政治や教育と異なり、科学技術については敗戦の前後で基本的な枠組みはほとんど変わりませんでした。また、第二次大戦中に兵器開発に従事していた技術者が、戦後は民間企業で技術開発の最前線に立ちました。その意味でも科学技術の世界では戦前と戦後は連続しています。品質管理などでは面目を一新した一方、DNAとして引き継がれことも多いはずで、総力戦という国同士の待ったなしの真剣勝負にさらされた日本の兵器技術が、ある意味で日本の現代技術を映し出す鏡となるのも当然かも知れません。

上で述べた2つの特徴は、それぞれ「タテ割りの技術文化」と「直接成果主義」という問題に行きつきます。そしてこの2つこそ横幹連合が克服を目指している日本の科学技術の宿阿を代表するものと言えましょう。

* (独) 理化学研究所 BSI, トヨタ連携センター長

「日本の匠，日本の技」という本が最近出ました。題名から，よくある町工場が生んだ技能のサクセスストーリーを集めた本と思い，手に取ってみて驚きました。内容はIPA（情報処理推進機構）が支援したソフトウェア開発のサクセスストーリーを集めたものでした。ソフトウェアを「匠の技」と見るのはどのような感覚なのでしょう？私は，ソフトウェアこそ技術の普遍化が行きついた極限的な姿で，匠ということばから連想される職人芸や美学からもっとも遠い位置にある技術とっていました。「横幹」の創刊号に，連合理事の遠藤先生が「日本文化における人工物観 時計技術はなぜ人形浄瑠璃を生んだか」と題する興味深い論文を発表しておられます。日本に伝わった機械時計は日本では産業や技術として育たず，やがてからくりから独自の芸術である人形浄瑠璃を生み出したとのことで，その文化的な背景を，時計が自動機械を生みやがてコンピュータに行きついた西欧と比較して論じておられます。近世日本では技術と芸術が常に背中合わせに接触していたのです。それがいまでも日本の技術者にDNAとして残っています。ソフトウェアすら，匠の世界に結びつけなければ気が済まないほど日本人はこの言葉がよほど好きなのでしょう。ひょっとするとこれが日本のソフトウェアの足をひっぱっているのではないかと，とも思いました。

横幹連合は学会の連合体です。会員は学会ですから，会員学会の会員である研究者個人には直接アクセスすることは出来ません。しかし，会誌の発行やコンファレンスの開催，研究会活動など，連合の活動は学会と同じように個人が担っています。ここに連合の弱み，苦しいところがあります。一方，傘下の42学会延べ会員6万人があわせもつ多様な知とその総量の大きさは連合の財産です。42学会がそれぞれ密度の濃い活発な研究活動を続けていることは，先日来行ってきた会員学会執行部と連合執行部との個別の話し合いで実感いたしました。それぞれの専門分野で充実した知の世界を構築しておられることに感動しました。これこそ横幹連合のもつ可能性の証しです。この巨大な知の集積を日本の科学技術の新しい歩みに合流させ，知の統合に向って大きくはぐくみ花を咲かせて行くことが連合の使命です。

現代社会が科学技術に依存する度合いが高まるにつれて，科学技術の力が国の存在感を左右する時代になりました。軍事に代わって科学技術が国の戦略の中枢を占めるようになりました。市川惇信先生はこのことを「知拡競争」とよんでおられます。わが国が知拡競争で敗戦を繰返さないためにも，横幹連合に課せられた任務は重いと言わなければなりません。御支援を心からお願いいたします。